

# 司空曙送別詩論

全国漢文教育学会第39回大会  
2024年7月13日（土）13：00～  
於北海道教育大学旭川校

担当：筑波大学大学院 福原早希

# はじめに——司空曙について

司空曙（740？—805？）

- 広平（現在の河北省邯鄲市）の出身。765年頃に科挙及第の後、左拾遺、節度使幕僚などを歴任。
- 清廉で権威に媚びない性格。その詩は幽閑などと評される。
- 錢起、盧綸らと併せて「大曆十才子」のひとりに数えられ、大曆（766—779）を中心に活躍する

司空曙詩大致可分為五個類別，大致情況是：

（一）送行傷別詩。有《九日送人》、《送李嘉祐正字括圖書兼往揚州觀省》等五十二首，占全部一百七十四首作品的約百分之二十九。

（二）贈寄唱酬詩。有《贈庾侍御》、《贈李端》共三十八首，占全部作品的近百分之二十二。

（三）訪遊抒懷詩。有《早春遊慈恩南池》、《過胡居士睹王右丞遺文》詩作共二十九首，占全部作品的近百分之十七。

（四）寫景題詠詩。有《皇子陂》、《秋園》詩作共三十八首，占全部作品的近百分之二十二。

（五）其他雜詠詩。有《殘鶯百轉歌同王員外耿拾遺吉中孚李端遊慈恩各賦一物》等。此類詩十七首，占全部作品的近百分之十。

## 司空曙詩 總詩歌數174首

送行傷別詩：52首（29%）

贈寄唱酬詩：38首（22%）

寫景題詠詩：38首（22%）

訪遊抒懷詩：29首（17%）

他17首（10%）

●明・胡應麟撰『詩藪』（上海古籍出版社、一九五八年）六六頁。

劉長卿送李中丞張司直，錢起秋夜對月，皇甫冉巫山高和王相公，皇甫曾送李中丞華陰，司空曙別韓紳、送史澤，李嘉祐江陰官舍，秋夜寓直，韓翃送陳錄事李侍御，于良史冬日野望，李益別內弟，文皆中唐，妙境往往有不減盛唐者。

明・胡應麟『詩藪』内編卷四、近体上五言

劉長卿「李中丞張司直を送る」、錢起

「秋夜月に対す」、皇甫冉「巫山高」、王相

公に和す」、皇甫曾「李中丞を華陰に送

る」、司空曙「韓紳と別る」「史沢を送

る」、李嘉祐「江陰の官舍」「秋夜の寓

直」、韓翃「陳録事李侍御を送る」、于良

史「冬日の野望」、李益「内弟と別る」は、

文皆な中唐たり、**妙境は往往にして盛唐を**

**減らざる者有り**

彼（＝盛唐・王維（発表者補注））の送別詩は、①五言律詩型を標準とし、②旅立つ者の前程にある風景の描写「沿路の叙景」を配置するものであった。（中略）彼の整備した画一的な様式を備えた送別詩は、官人の赴任を壮行する儀礼的な送別の宴会において彼自身によって実作され、しかもまた王維の影響力の下に、忽ちに送別詩の典型として定着していった。

（前略）大曆十才子たちは、王侯の邸宅で催される送別の宴に集っては王維の典雅な送別詩を祖述し、かくして安史の乱を克服した中興の御代を文飾したのである。しかしこうした典型の祖述がもたらす徹底した様式化は、送別詩の悪しき画一化を招くことになり、やがては送別詩の多作・濫作は、それ自体が克服されるべき対象とならなければならなかった。

●松原朗「序論－主題と様式」（『中国離別詩の成立』研文出版、2003年）9頁。



A) 五言律詩型を標準とする

B) 旅立つ者の前程にある風景の描写「沿路の叙景」

C) 当たり障りのない被送者に対する儀礼的な激励の言辞

●松原朗「序論－主題と様式」(前掲書)9頁、松原朗「大曆様式の超克」(『中国離別詩の成立』)294頁参照。

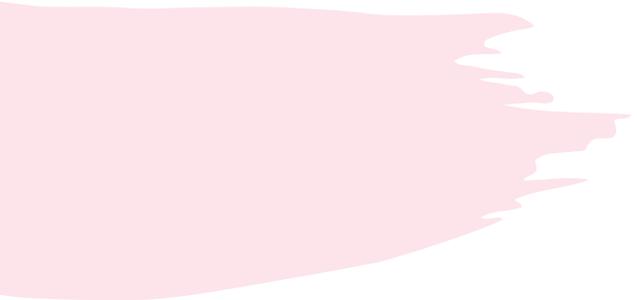
送喬廣下第歸淮南

- 1 遙想長淮盡 ○●○○● 遙かに想ふ 長淮の尽くるを
- 2 荒堤楚路斜 ●○○●●◎ 荒堤 楚路斜めなり
- 3 戍旌標白浪 ●○○●● 戍旌 白浪より標(しる)し
- 4 罟網入青葭 ●●●○○◎ 罟網 青葭に入る
- 5 啼鳥仍臨水 ○●○○● 啼鳥は仍ほ水に臨み
- 6 愁人更見花 ○○○●◎ 愁人は更に花を見る
- 7 東堂一枝在 ○○○● 東堂に一枝在り
- 8 為子惜年華 ○●●○○◎ 子が為に年華を惜しまん

【現代語訳】 喬広が落第して淮南に帰るのを見送る

淮河の尽きる方角を遙かに思う／荒涼とした堤防の楚地（淮南へ）の道は曲がりくねっている／国境守備の軍旗が白波からあらわれ／魚網が青々と茂る葦に流れ入る／さえずる鳥はやはり水辺に身を置き／憂愁を帯びる君はますます花を見る／殿試が実施される東堂に一枝の桂があるが／君のために（次の試験までに）簡単に過ぎ去ってしまう年月を惜しむこととしよう。

7 「東堂一枝」は、『晋書』卷五二「郤詵傳」「臣舉賢良對策、為天下第一、猶桂林之一枝、崑山之片玉」（詵對して曰く、「臣賢良に挙げられて對策し、天下第一と為る、猶ほ桂林の一枝、崑山の片玉のごとし」と）を踏まえて、喬廣の科擧の及第を示すもの。



## 司空曙送別詩52首

五言絕句：2首

七言絕句：7首

五言律詩：37首

七言律詩：3首

五言古詩：3首

### 送王閏

1	相送臨寒水	○	●	○	○	●	相ひ送るに寒水に臨み
2	蒼茫望故關	○	○	●	●	◎	蒼茫として故関を望む
3	江蕪連夢澤	○	○	○	●	●	江蕪 夢沢に連ね
4	楚雪入商山	●	●	○	○	◎	楚雪 商山に入る
5	話我他年舊	●	●	○	○	●	我に他年の旧を話し
6	看君此日還	○	○	●	●	◎	君の此の日に還るを看る
7	因將自悲淚	○	○	○	○	●	因りて自ら悲涙するを將て
8	一灑別離顏	●	●	○	○	◎	一に別離の顔に灑ぐ

### 【現代語訳】王閏を見送る

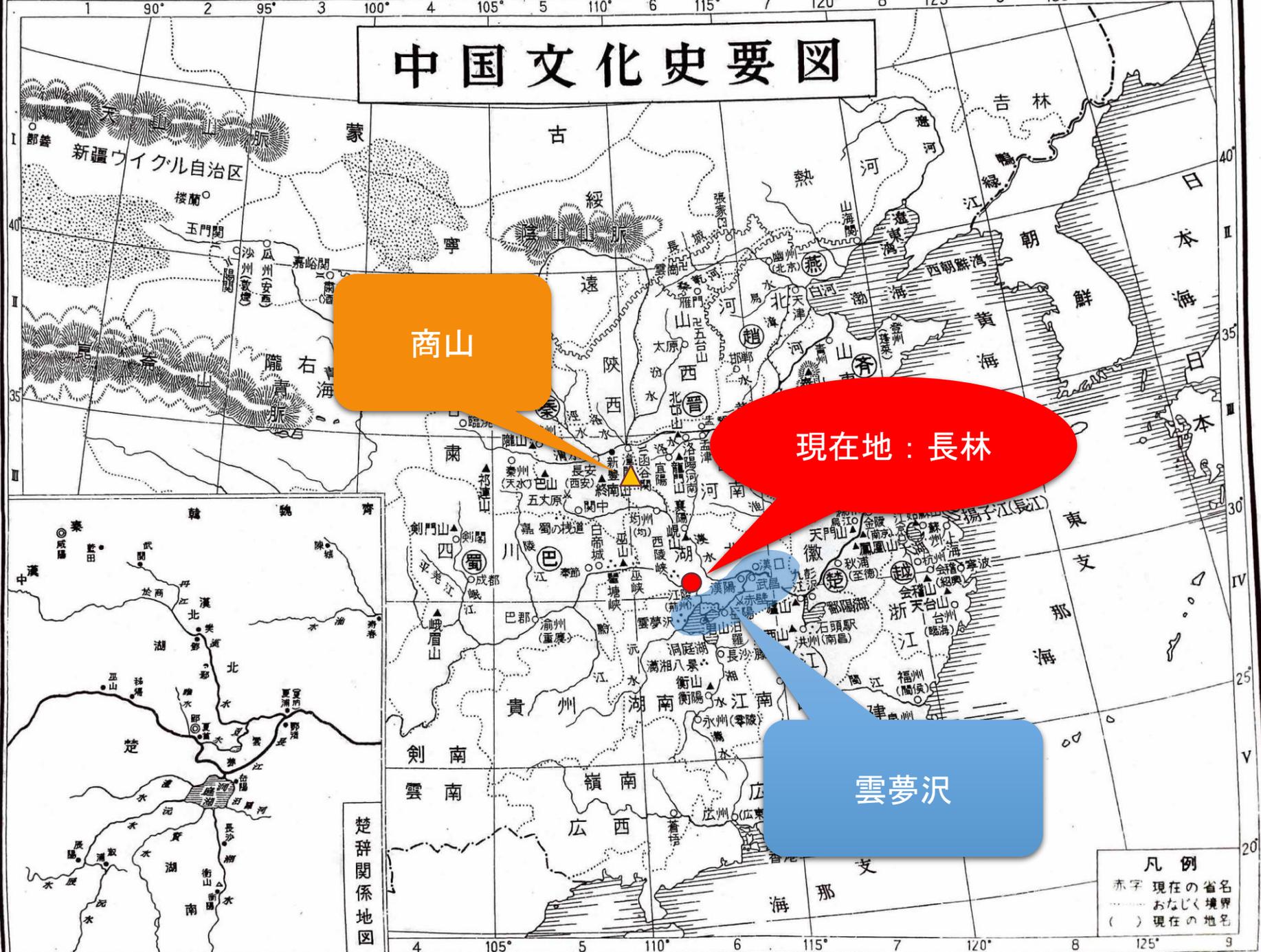
王閏を見送るために冷たい水辺に赴いて／彼方の故関を眺める／川辺の雑草は雲夢沢に続き／楚地の雪は商山にまで及ぶ／（君は）私に昔からの情誼について語り／（私は）君が今日（商山の方角へ）帰ってゆくのを見る／だから自分の身を悲しんで、別れの顔にただ涙を流すのである

### 【解題】

本詩は、司空曙が左拾遺から左遷されて江陵郡長林（現在の湖北省荊州市）丞の任にあった時に、友人王閏が、商山（陝西省商県）の方角に向かって帰るのを見送ったと考えられる。

3 「夢沢」は、『史記』卷一二九「貨殖列傳」に「江陵故郢都、西通巫・巴、東有雲夢之饒（江陵は故の郢都にして、西のかた巫・巴に通じ、東のかた雲夢の饒有り）」とみえるように、江陵の東方に位置する。

# 中国文化史要図



3・4 「江蕪連夢澤、楚雪入商山」

●星川清孝 中国文化史要図（新釈漢文大系 楚辞）明治書院、一九七〇年に発表者が補う。

## 送王閏

1 相送臨寒水	○	●	○	○	●	相ひ送るに寒水に臨み
2 蒼茫望故關	○	○	●	●	◎	蒼茫として故関を望む
3 江蕪連夢澤	○	○	○	●	●	江蕪 夢沢に連ね
4 楚雪入商山	●	●	○	○	◎	楚雪 商山に入る
5 話我他年舊	●	●	○	○	●	我に他年の旧を話し
6 看君此日還	○	○	○	●	◎	君の此の日に還るを看る
7 因將自悲淚	○	○	○	○	●	因りて自ら悲涙するを將て
8 一灑別離顏	●	●	○	○	◎	一に別離の顔に灑ぐ

### 【現代語訳】 王閏を見送る

王閏を見送るために冷たい水辺に赴いて／彼方の故関を眺める／川辺の雑草は雲夢沢に続き／楚地の雪は商山にまで及ぶ／（君は）私に昔からの情誼について語り／（私は）君が今日（商山の方角へ）帰ってゆくのを見る／だから自分の身を悲しんで、別れの顔にただ涙を流すのである

### 【解題】

本詩は、司空曙が左拾遺から左遷されて江陵郡長林（現在の湖北省荊州市）丞の任にあった時に、友人王閏が、商山（陝西省商県）の方角に向かって帰るのを見送ったと考えられる。

7 「自悲淚」は、自らの不遇を悲しんで涙すること。『楚辞』宋玉「九辯」 「靚杪秋之遙夜兮、心繚悵而有哀。春秋連連而日高兮、然惆悵而自悲（靚かななる杪秋の遙夜、心は繚悵して哀しむ有り。春秋は連連として日びに高く、然く惆悵として自ら悲しむ）」を踏まえる。同時代の用例に、李嘉祐「夜聞江南人家賽神因題即事」（『全唐詩』卷二〇六）「逐客臨江空自悲、月明流水無已時（逐客江に臨みて空しく自ら悲しみ、月明流水時を已む無し）」がある。

● 儀礼性の欠落 ● 自己の不遇感の露見



初唐・張説「南中別蔣五岑向青州」〈其一〉（『全唐詩』  
卷八八）

- 1 老親依北海 老親北海に依り
- 2 賤子棄南荒 賤子南荒に棄てらる
- 3 有淚皆成血 淚の皆な血と成る有り
- 4 無聲不斷腸 聲の腸を断たざる無し
- 5 此中逢故友 此の中に故友に逢ひ
- 6 彼地送還郷 彼の地に郷に還るを送る
- 7 願作楓林葉 願はくは楓林の葉と作り
- 8 隨君度洛陽 君に隨いて洛陽に度らん

司空曙「九日送人」

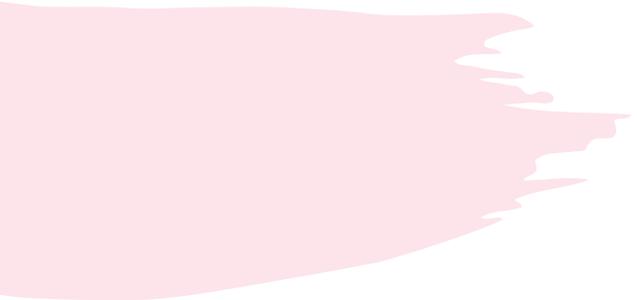
送人冠獬豸、值節佩茱萸。均覆徵三壤、登車出五湖。  
水風淒落日、岸葉颯衰蕪。自恨塵中使、何因在路隅。

司空曙「送鄭侂歸洛陽」

蒼蒼楚色水雲間、一醉春風送爾還。何處鄉心最堪羨、汝南初見洛陽山。

司空曙「峽口送友人」

峽口花飛欲盡春、天涯去住淚沾巾。來時萬里同為客、今日翻成送故人。



樂府も含めて彼の文学全体に底流する基調＝不遇感の表白は、とりわけその離別詩において、決定的な形で現されてくる。鮑照の離別詩は、いわば体験告白の作としての色調が濃厚である。彼の離別詩は、いつも、不遇の思いをつのらせる地方の任地を舞台とし、また多くの場合、彼によって送られるのは彼をおいて栄転してゆく羨しい友人だった。鮑照は、こうした状況を確実に踏まえつつ、離別詩を作ろうとしている。

●松原朗「鮑照による離別詩の開拓」(『中国離別詩の成立』)44頁。

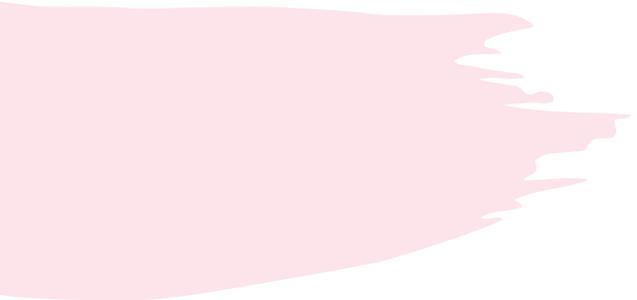
劉宋・鮑照「送盛侍郎餞候亭」（『全宋詩』卷八）

- 1 霑霜襲冠帶 霑ふ霜は冠帯を襲ひ
- 2 驅駕越城闈 駕を驅りて城闈を越ゆ
- 3 北臨出塞道 北のかた塞を出づるの道に臨み
- 4 南望入鄉津 南のかた郷に入るの津を望む
- 5 高墉宿寒霧 高墉に寒霧を宿し
- 6 平野起秋塵 平野に秋塵を起こす
- 7 君為坐堂子 君は堂に坐するの子たるも
- 8 我乃負羈人 我は乃ち羈を負ふの人なり
- 9 欣悲豈等志 欣びと悲しみと豈に志を等しくせん
- 10 甘苦誠異身 甘きと苦きと誠に身を異にす
- 11 結涕園中草 涕を結ぶ 園中の草
- 12 憔悴悲此春 憔悴して此の春を悲しむ

7 「坐堂」は、広間に座ること。『楚辞』宋玉「招魂」  
「坐堂伏檻、臨曲池些（堂に坐し檻に伏すれば、曲池に臨む）」。

8 「負羈」は、馬に乗り出征すること。ここでは、君主に従順でいつまでも遠征を課せられている鮑照のことを表しているよう。『春秋左氏傳』「僖公二十四年」  
「子犯以璧授公子曰、臣負羈紼、從君巡於天下（子犯璧を以て公子に授けて曰く、「臣羈紼を負ひて、君に従ひて天下を巡る」と）」

この他、「與伍侍郎別」「吳興黃浦亭庾中郎別」「送別王宣城」「送從弟道秀別」「與荀中書別」の鮑照詩も同様。



## まとめ

- 司空曙は、社交のために儀礼性・客観性を重視した送別詩を作る一方で、自己の不遇感といった個人的な抒情が露見する、より内へ内へと閉じられた送別詩も制作していた

## 【参考文献】

- 胡應麟撰『詩藪』（上海古籍出版社、1958年）
- 『全唐詩』（中華書局、1960年）
- 星川清孝『新釈漢文大系 楚辭』（明治書院、1970年）
- 逯欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩』（中華書局、1983年）
- 松原朗『中国離別詩の成立』（研文出版、2003年）
- 文航生校注『司空曙詩集校注』（人民文学出版社、2011年）